

古今

琵琶

歌集

251  
374

特48  
910



大和魂の花  
忠臣烈士の面影を描き傳ふる物語急調緩調  
一聲に大珠小珠玉盤の上にと轉ぶ四つの緒  
の嘈々切々響く曲聞かば勇者も怒るべく懦  
夫も奮ひて起ちやせん鬼も坐ろに感動し腸  
断るゝ心地して涙と共に角も落つ

征露二とせの夏

琵琶の家



明治  
39 1 24  
内交

一本書ハ隨聞隨筆ナルヲ以テ歌曲ノ順序排列ヲ選バザルナリ  
 一本書ノ印刷ハ急遽ナリシ爲メ或ハ文字ノ脱漏誤謬ノ點甚カラザルベシ  
 一本書ハ再版ノ期ヲ待テ増補訂正スル所アルベシ

編者識

# 古今琵琶歌集

## 目次

○梅は匂ひ	一頁
○清瀧川	一頁
○月は朧	一頁
○春の夜	二頁
○金剛石	二頁
○白虎隊	三頁
○軍神廣瀬中佐	四頁
○常陸丸	六頁
○谷村計介	七頁
○城山	九頁
○一の谷	十一頁
○那須與市宗高	十二頁
○元寇筑紫の神風	十三頁
○盛久	十五頁
○墨繪の龍湖水譽	十七頁
○臺灣入	二十頁
○小督	二十二頁
○吉野落	二十四頁
○阿新丸	三十頁
○阿新丸(二段)	三十四頁
○潯陽江	三十八頁

○雲のまがき……………四十二頁

○蓬萊山……………四十五頁

○迷悟もどき……………四十六頁

○春のしらべ……………四十七頁

○千早振……………四十七頁

○怨みの雪……………四十八頁

○富士山……………五十頁

○國の響……………五十一頁

○琵琶の徳……………五十三頁

○軍人の琵琶……………五十四頁

○征我軍九連城を陥る……………五十五頁

○牧澤大尉……………五十九頁

○旅順の陥落……………六十一頁

○陸軍第一田所清熊氏を悼む……………六十四頁

古今琵琶歌集目次終

古今琵琶歌集

琵琶の家編

梅は匂ひ

梅は匂ひて櫻は色よ  
 峰の小松や岩つち  
 吉野の櫻や北野の梅も  
 散りての後は色も香もなし、  
 枯木を残せば年々に  
 世に果敢なきは皆人の身の、  
 長の月日に短の命  
 今日の樂こそ目出度けれ

清瀧川

清瀧川の水さよ濁る  
 娑婆と冥土の界には  
 なさけに一度はあくこかや  
 色よき花とは申せども  
 何日が花やら蕾やら

月はねぼろ

月はおほろの影暗く

神も一度の迷ひあり  
 鬼の立てたる石のこも  
 深山櫻や岩つち  
 人も通はぬ山中なれば  
 只徒に散り果つる

夜嵐冴ゆるいんのしよう

○梅は匂ひ清瀧川月はおほろ

忍ぶたよりも足曳の  
追ひ参らせしなまよみの  
撃たく微に響く三更の聲  
時に劍戟の閃めくあり  
微塵ひるまぬ大丈夫が  
心おく露ふみしだし  
燃ゆる思を櫻木に  
大和心や花の香の  
世々に薫りて勇ましき

春の夜

春の夜の山路を忍ぶ  
影は隠れて見へねども  
尋ね来りしいんのしよう  
おほろに見ゆる櫻木に  
時に范蠡無きにしもあらず、  
涙ながらに伏し拜み  
譽さ共に千代八千代

金剛石

金剛石も磨かずば  
人も學びて後にこそ  
時計の針の絶間なく  
日影惜しみて勵みなば

山越野越遙々  
甲斐なき身こそ墓なけれ  
警固おそそかにして  
幾百萬のつわ者にも  
木にもかやにも中々に  
衛士が焚く火の其れならで  
寫せば唐の言の葉も  
世々に薫りて勇ましき

忠義の蓑笠  
心は赤き大丈夫の  
たきしががりの煙さへ  
天勺踐を空しくする勿れ  
主は夫れ共見へねども  
君が残せし筆の跡  
萬代掛けて残るらん

玉の光は添はざらん  
誠の徳はあらはるれ  
廻るが如く時の間の  
如何なる事をか成らざらん

水も器に従ひて  
人も交る友により  
己に勝る善き友を  
心の駒に鞭うちて

白虎隊

時維れ慶應戊辰の秋  
明けて悔しき戸の口に  
敵の兵船湖を  
早や分け登る笹山路  
眼にも餘れる大軍を  
人数も僅か三十七  
危急の難に氣は勵み  
節は九鼎の重きに比へ  
人の花てふ稚櫻  
群羊馳る白虎隊  
衆寡敵せず蟻螂の  
無惨や遂に敗蹟し  
砲煙彈雨の中を過ぎ  
斯くては今を是非もなし  
我等が進退決せんこ  
漸く飯盛山に攀登れば  
渦巻く黒烟舞上り

其様々に成りぬなり  
善きに悪しきに移るなり  
撰び求めて諸共に  
學の道に進めかし

八月二十三日の曙や  
走せ着く甲斐も渚漕ぐ  
渡りて跡は白波こ  
雲か霞か將た山か  
迎へ討たん少年の  
忠義の二字に身を固め  
命を鴻毛の輕きに置き  
忠勇義烈の武者振は  
此一團を名にし負ふ  
暫時奮戦防ぎしが  
斧の譬へに異ならず  
残る所の十六士  
丘の麓に退きて  
君の御先途見奉り  
瘡痕を包み劍を杖さ  
こは抑も如何に悲しやな  
鶴が城の有様に

無限の感慨湧き出で、  
 流れて袖に浸しけり  
 砲聲山岳を動かし  
 其有様の凄じさ  
 遙に城中伏し拜み  
 君亡び國滅す  
 嗚呼君公よ我父母よ  
 受けし御恩やいつくしみ  
 兼ねて諦め居りつれど  
 御訓戒の言の葉や  
 盡せぬ名残を如何にせん  
 敵の妨害受くるべき  
 残る忠孝盡さんご  
 飯盛山の朝露ご  
 幹は枯れても若松の  
 常盤にかきわに残るらん  
 忠烈悲壯の魂魄を  
 苔むす下に吊はん

軍神廣瀨中佐

神州男子數あれど  
 世界に示す鑑ごは  
 既に一度死を期して

落つる涙に瀧澤の  
 折しもあれや敵軍の  
 鯨波天地に震ひ  
 城既に落ちたる如くなれば  
 孤城天下の大軍を引受け  
 臣等が事遂に終りぬ  
 十六年が其間  
 報ひん時は斯くごしも  
 先きつ日ま見へし面影や  
 耳目に今は止まりて  
 左は云へ時しも移りなば  
 いざ諸共に泉下にて  
 いざ潔く決心し  
 共に果敢なく消にけり  
 朽ちせぬ名こそ千代かけて  
 王師に逆ひし罪あるも  
 其勳功や慰むべし  
 苔むす下に吊はん

男子の中の眞男子  
 廣瀨中佐の事ならん  
 旅順封鎖に向ひしも

事意に充たぬ無念さは  
 元より君に捧げし身  
 父の寫眞に兄の文  
 斯る強將上にあり  
 兵曹杉野就中  
 上下心を一にして  
 其大佐は船底に  
 探海燈は稻妻か  
 中をひるます悠々ご  
 斯くて任務を果せしも  
 姿も見へず影もなし  
 杉野は何處兵曹ご  
 こたまご聞くは砲彈の  
 三度求めて三度得ず  
 促されつゝ本意なくも  
 時しもあれや轟然ご  
 血煙船に立ちこめて  
 五尺の軀の名残なる  
 忠血義血俠血の  
 あな勇しの軍神  
 我帝王や守るらん

再び結ぶ決死隊  
 妻も迎へず子も持たず  
 是ぞ肌守りなる  
 下に弱卒なごあらん  
 中佐が無一の股肱たり  
 入るや虎穴の奥深く  
 積める石より尙重し  
 水雷は實に雷か  
 行くや名に負ふ鬼中佐  
 我兵曹は如何にせし  
 哀れ杉野は討たれしか  
 呼べご答は荒波に  
 船に碎くる響のみ  
 斯くては君も危しご  
 小舟に移り乗らんごす  
 耳を劈く敵彈の  
 中佐の姿最早なし  
 只一寸の肉塊らは  
 千古朽ちぬ寶ぞや  
 七度人に生れ来て  
 あな勇しの軍神

常陸丸

征露の軍やうく進み  
 旅順の湊も閉塞し  
 君か稜威の旗風に  
 心筑紫の島はなれ  
 日の丸掲ぐる常陸丸  
 船路の果は白波の  
 何を荒ぶる荒潮の  
 只一筋に走り来て  
 こは何事と言ふ間なく  
 進み遁れん暇もなし  
 水に入りては如何にせん  
 波には翼折ぬべし  
 我は一個の運送船  
 任せ果しを詮方なき  
 霧に隔たり分ねども  
 輸送指揮官須知中佐  
 大久保少尉が捧たる  
 都の方を伏し拜み  
 各將校もこりくりに  
 此有様を打見つゝ  
 無念の涙はらくこ

南山の險も打破り  
 鷲の棲むてふ満州も  
 今は草かぬ草もなし  
 支界灘のたゞ中に  
 佐渡も續いて進みゆく  
 寄へや如何に遠からむ  
 逆巻く中の黒煙  
 我を取巻く敵の艦  
 亂射亂撃雨あられ  
 千里を走る猛獸も  
 萬里も翔る大鷹も  
 心ばかりは早やれども  
 進退極まり敵艦に  
 佐渡は如何に眺むれば  
 同じ様なる連の末  
 是迄なりこや思ひけん  
 聯隊旗をば手に取りて  
 火を放ちて焼き棄つれば  
 貴重品の焼き棄てたり  
 中佐は軍刀逆手に持ち  
 落つるを袖にて紛かし

萬歳唱へニヤツと笑ひ

連なる將校始めこし

同じ枕に伏すもあり

敵彈益々加はれば

流るゝ血潮に支界の

君萬歳の聲細く

憐れ果敢なき常陸丸

夕日は波に落ちざれど

黒白も分かぬ計りなり

駒の蹄に満州を

ツラル、バイガル打越む

水漬屍と消へしかど

清き其名は萬代も

絶ゆる時なく仰がれん

谷村計介

隙行く駒の足はやみ

硝煙空に漲ぎりて

砲聲山に谷して

明治十年の夜更着や

阿蘇山嵐小夜ふけて

いと幽けき肥後の城

稻摩竹葦の開が中を

腹かき切て矢にけり

下士兵卒に至るまで

海に投じて死するもあり

甲板の上は屍の山

波は朱にぞ變じける

潮の沫と消へてゆく

時は六月十五日

霧立ち掩ふ海の上

嗚呼一聯隊を我勇士

踏にじらんも夢なれや

あらましこころも幻しか

國に殉ぜし大丈夫が

響の灘に立つ波の

末まで遠く流るらん

今は昔となりぬれど

天日爲めに光りなく

常盤樹爲に落葉せし

春は云へど肌寒き

おちこちに焚く篝火も

薩摩隼人の圍みつる

竊かに忍び出でたるは

頭到大君あるを知り  
 身をも家をも忘れたる  
 姓は谷村名は計介  
 重きをになふ大丈夫  
 熊本城兵幾千の露  
 燈火か开も草の露  
 都の軍に通ぜよこ  
 賤の男子にやつしつゝ  
 辿り行こそ健氣なれ  
 来たれたる孤鬼の道  
 端なく入りし敵の陣  
 賤しからざる面魂  
 いざ言へ聞かん疾く責めよ  
 丁々發石と打つ下に  
 鮮血にしみる藁むしろ  
 眩暈昏亂絶へ入と  
 幾ぞ許ぞの艱難も  
 絞りて堪ゆる真心の  
 眠る守兵を幸ひと  
 切て捨てたる放し鳥  
 又も擒となりしかど  
 死では甦り甦りては

眼に國家を知るの外  
 軍人龜鑑と名にし負ふ  
 身は眇々たる伍長にも  
 四面に楚歌の聲絶へず  
 人の命は風前の  
 守城の略を兎角して  
 重き使命に身は輕き  
 心置く露ふみ分けて  
 素より忍ぶ山峽の  
 迷ひ易かる習ひとて  
 遂に擒となりふるも  
 必らず敵の間者なり  
 情け容赦も荒男の  
 肉は燻れて紅の  
 骨は碎けて自づから  
 塵露洩す事やある  
 御國の爲と腹こ  
 天神地祇を感じけん  
 十重廿重なる縛を  
 虎口を出で、鰐の口  
 辛くも之を欺むさつ  
 又死す程の辛酸を

嘗めて漸く辿り來し  
 野津少將に見へしも  
 其の全身を震はすのみ  
 言はんと思ふ言葉より  
 千條百條膝を打つ  
 忠憤義烈に少將は  
 开が本陣へを留めらる  
 其の曉の激戦に  
 計介眺めて席を蹴り  
 露の命を何かせん  
 他人の銃を奪ひ取り  
 古今に稀有の殊死奮闘  
 果敢なく消へて十餘年  
 辱なくも皇の  
 九段阪上雲を衝く  
 千代萬代の果しなき  
 榮ゆる名こそ慕はしき

城山

夫れ達人は大觀す  
 榮枯は夢か幻か  
 眞如の月の影清く

近衛の陣の旭の御旗  
 計介は只唇と  
 萬感胸に湧きかへれば  
 先つものは袖の雨  
 泪の玉の曇りなき  
 感歎厚く勞はりて  
 頃しも三月四日云ふ  
 官軍利なく崩るゝを  
 花は櫻よ人は武士  
 死ねや死ねやと呼はりつ  
 單身敵に突いて入り  
 つらぬき留めぬ草の露  
 聞も涙の種ながら  
 其忠烈を嘉みせられ  
 軍人龜鑑の紀念碑は  
 昇る朝日に輝きて

勝海舟作

拔山蓋世の勇あるも  
 大隅山の狩鞍に  
 無念無想を觀すらん



何を怒りに怒り猪の  
 勇みに勇むはやり雄の  
 留まり難ぞ是非もなき  
 若殿原にむくひなん  
 諸手の軍打ち敗れ  
 霜の紅葉のくれないの  
 薩摩武雄のをたけびに  
 殺たばしる如くにて  
 木魂に響くごさの聲  
 落る如き有様を  
 あな勇ましの人々や  
 腕の力もためし見て  
 いざ諸共に塵の世を

孤軍奮闘衝圍還  
 吾劍既折吾馬斃

秋風埋骨故郷山  
 一百里程壘壁間

俄に激する数千騎  
 騎虎の勢ひ一徹に  
 唯身一つを打捨て  
 明治十年の秋の末  
 討ちつ討れつ頓て散る  
 血汐に染めど顧りみぬ  
 打散る玉は板屋うつ  
 面をむけん方ぞなき  
 百の雷ひと時に  
 隆盛打見てはゞぞ笑み  
 亥の年以來養ひし  
 心に残ることもなし  
 脱れ出でんは此時こ

桐野村田を始ごし  
 煙ご消ぬし大丈夫の  
 官軍此を望み見て  
 君の寵遇世の覺る  
 今はあへなく岩崎の  
 移れば變る世の中の  
 無量の思ひ胸に充ち

唯悄然と隊伍を整へ  
 折しもあれや吹き下す  
 岩間に結ぶ谷水の  
 悲鳴するかご聞なされ  
 戎衣の袖を濡しける

一の谷

抑も熊谷次郎直實は  
 關東一の旗がしら  
 世にも知られし勇士なり  
 源平須磨の戦に  
 聞くもなかく憫なり  
 沖なる船に後れじご  
 一町許り進みしを  
 互に鎬を削りしが  
 見れば二八の御顔に  
 涅齒黒々ご附け給ひ  
 君は如何なる御方を  
 無官の太夫敦盛ぞ  
 西に向ひて掌を合せ給へば  
 我が子の事を思ひやり  
 鎧の袖を絞りつゝ  
 南無阿彌陀佛の聲諸共に

目ご目を見合す許りなり  
 城山松の夕あらし  
 無情の聲も何ごなく  
 戎衣の袖を濡しける

征夷將軍頼朝公の御内にて  
 智勇兼備の大將ご  
 されば壽永三年の  
 功名ありし物語り  
 其時平家の武者一騎  
 駒を波間に打入れて  
 扇を揚げて呼び戻し  
 兩馬が間に組伏して  
 花も粧ふ薄化粧  
 斯る優しき扮装に  
 我こそ參議經盛の三男  
 早々首を討れよご  
 追に猛き熊谷も  
 落つる泪は留まらず  
 是非なく太刀を振揚て  
 首は前にご落にけり

無残や花の蕾さへ  
是を菩提の種として  
御無き骸に言ひ残し  
八島の陣へ送りしは  
心の内ぞあわれなる  
都に上り元祖大師を師と頼み  
晝夜念佛怠らず

那須與市宗高

偕ても那須與市宗高は  
逞し氣なる黒馬に  
ゆらりと乗りは乗りつゝも  
兩軍肩唾を吞ながら  
若も過つ事あらば  
一筋の矢に百年の  
健氣の覺悟で憫なる  
矢頃計りて控ゆれば  
日影浸せし海の面  
立騒がする北の風  
或は低く又高く  
定めがたきぞ怨みなる  
心の内に祈るよう  
日光權現那須明神

須磨の嵐に散にける  
永々吊ひ申さんご  
青葉の笛を取添て  
寔に情ある武士の  
其身遂に蓮性法師と名乗つゝ  
剃髮禪衣の身となりて  
目出度往生爲し給ひける

己むなく御詫畏みつ  
金覆輪の鞍を置かせ  
是や生死の海ならん  
目を注ぎたる晴の場所  
其場を去らで死なんすご  
命を賭る武士の意地  
馬を渚に打せつゝ  
時に夕陽かたむきて  
黄金をたゝむ浦波を  
船諸共に軍扇の  
右に左にゆらめきて  
宗高馬上に目を閉て  
南無や八幡大菩薩  
今の與市を憫れども

見給ふ慈悲の在しまさば  
暫時の守護を  
誠よりなる一心の  
風なき波も鎮まりつ  
宗高心押しづめ  
命をしほる右手左手  
飄を放ては鏑矢の  
羽はたく隙もあらばこそ  
發止と絶て矢は海に  
そよく嵐にひらくこと  
夕日を受けて一段の  
敵も味方も感に堪へ  
箴を鳴す源氏方  
賞め聲鳴りも止まざりし  
矢島の浦を打波の  
響聞ゆる文の上  
實にも千古の武名なり

元寇筑紫の神風

我が日の本は昔より  
大和心にかためたる  
茂り榮へし忽必烈  
勝誇りたる餘威を以て

〇元寇筑紫の神風

此波風を打しづめ  
南無や八幡大菩薩  
天に通じて自から  
射よけに見ゆる船の的  
征矢抜き取て打香ひ  
能く引き堅め氣を吞て  
浦に響きて啼く千鳥  
規ひ違はず金目をば  
扇は空へ翻へり  
花の紅葉が入り残る  
眺榮ある有様に  
舳叩く一門に  
内ご揚たる兩軍の  
其かあらぬか今もなほ  
音諸共に宗高が  
寔にも千古の武名なり

義を見て勇む習の  
國ごも知らで醜草の  
四百餘州を靡けつゝ  
恐れ多くも天照す

神の御末の我國を  
 憫にも又けなけなれ  
 相摸大郎は世にしるさ  
 無禮の使者を兩度まで  
 六十餘州の同胞に  
 最ご心地よき限りなり  
 弘安四年秋のころ  
 幾千百の艦艦に  
 十餘萬ごぞ聞へける  
 九所男子の義氣勇散  
 武を揚けむすご馳せ向ふ  
 弓矢の神の玉櫛箭  
 旗手に通ふ天津風  
 殺氣を帯びる海の色  
 死を決したる眞心を  
 俄に一天かき曇り  
 罪を鳴らせる攻太鼓  
 颯と吹き出す神風の  
 左しにも去き艦も早や  
 咄嗟藻屑ならんずる  
 逆巻く浪に舟漕ぎて  
 或は斬りつ生捕りつ

臣妾にせん心こそ  
 當時鎌倉の執權たる  
 男子の中の男の子にて  
 由井が濱邊に斬捨つ  
 覺悟を示す勇斷は  
 彼は怒に得も堪へず  
 筑紫の海に押寄せる  
 乗せたる兵士は雲霞にて  
 斯くご見るより蹴起せし  
 異國人に今ぞ我が  
 土地は名に負ふ多々良より  
 箱崎かけて並へたる  
 降り來る雨は紅に  
 守りつ打ちつ諸共に  
 神も憫み玉ひけん  
 篠つく雨に雷の  
 天さへあるに小夜更て  
 荒れに荒れたる凄じき  
 帆柱は折れ舵碎け  
 様を眺めて我兵は  
 敵艦近く進み行き  
 ドツと揚けたる凱歌こそ

世に勇しき限なれ  
 玄海灘に打つ波も  
 見れば拳も揮はれて

盛久上

祇園精舎の鐘の音も  
 沙羅双樹の花の色は  
 日盛なれば見るく移り  
 世の習せぞ是非もなき  
 主馬の判官盛久は  
 今日を一期の別ぞご  
 雲井の空を後にして  
 旅へ向はせ玉ふこそ  
 此度關東に召るは  
 比叡の高根は淵となり  
 よしや流るく世はありごても  
 思も寄らん事にこそ  
 憫れ是なる乗物は  
 聞て土屋は打うなづき  
 御身が年頃觀世音  
 宗遠人づてに聞つる也  
 さしも畏こき誓の末

袖の港に澄む月も  
 昔貴ふごき紀念ぞご  
 大和心を勇みける

諸行無常の響なり  
 盛者必衰の理を示すごかや  
 月圓なれば忽ち缺くる  
 扱ても平家方の武士  
 源氏の軍に圍まれて  
 住もなれにし九重の  
 鳥が鳴くてふ東路の  
 世にも哀れの限りなれ  
 其に御渡り候や  
 主馬盛久が終の道  
 蟬の小川の逆しまに  
 某都に歸へらんは  
 斯れば今ぞ名残りなる  
 清水の方へ立せ給ふご  
 寔に殊勝なる望かな  
 信心喝仰し給ふ由は  
 しめしが原のちしも草  
 一世一念さへだにも

頼みありこそ聞へける  
 などて空しふ候へき  
 輿を其方へかますゆれば、  
 大慈大悲の春の花は  
 三十三神の秋の月は  
 清水寺の観世音  
 斯る苦難は厭はねど  
 未來の程ぞ恐ろしき  
 定業又善く轉ずるは  
 無限の慈悲の座さは  
 伏拜む手に散る花は  
 いざこて輿をかき上れば  
 いつ歸るべき旅ならん  
 四の宮河原四の辻  
 知るも知らぬも逢坂の  
 今の我をばよもごめじ  
 立よる方は鏡山  
 獄屋の内の起臥に  
 一日く迫るなる  
 勢田の浦邊の夕汐に  
 廻れば野邊に鳴海瀧  
 汐見板橋々もこの

況してや幾年の御結  
 いざく禮あれかしこ  
 盛久涙に咽びつゝ  
 十悪の巷に香しく  
 五濁の淵に影ぞすむ  
 醉生夢死の今の身に  
 宿惡深き魂魄の  
 大慈大悲は薩陀の悲願  
 即ち菩薩の直道こかや  
 未來を救はせ玉はれど  
 歸る春なき名残かな  
 あこ白河を行く波の  
 こゝは誰をか松坂や  
 是は此の行くも歸るも別ても  
 關守る人も捕はれの  
 勢田の長橋打渡り  
 左のみ年經ぬ身なれども  
 身は衰へし老曾の森  
 美濃尾張さへ打過ぎて  
 道をば波に隠されて  
 又八坂や高種山  
 濱名の橋を打渡り

又越ゆへしと思ひきや  
 小夜の中山大井川  
 越へても關に清見瀧  
 打出て見れば眞白なる  
 尙明け行くや星月夜  
 早や鎌倉に着にけり

墨繪の龍湖水之譽

夫れ良禽は林を擇び  
 左れど一旦身を許し  
 善惡共に身を捨て、  
 忠義をなすこ武士の  
 茲に明智日向守光秀は  
 味方もろくも打破れ  
 早や匿れなく聞けり  
 明智左馬之助光俊は  
 軍の様子見んものこ  
 敵に栗津の原越へて  
 大津の宿にかゝるころ  
 堀久太郎秀正が一萬騎  
 敵兵此邊に来るからには  
 坂本城こそ大事なれ  
 小冠者原に出逢して

○破繪の龍湖水之譽

命なりけりこ吟みたる  
 過行く波も宇都の山  
 三保の入海田子の浦  
 雪の富士の根箱根山  
 早や鎌倉に着にけり  
 賢者は君を撰むこかや  
 主こ頼みし人のため  
 笨狗が堯に吠ゆるなる  
 弓矢の意地こ知られたり  
 天王山の一戦に  
 同勢四方に散亂すこ  
 安土の城の留守居なる  
 君の先度の覺東なく  
 急けば廻る瀬田の橋  
 探みに揉で打出の濱  
 ハタこ出合ひし大軍は  
 光俊屹度思ふ様  
 君の妻子や叔父のある  
 左は去りながら今茲に  
 鎌も合はせて引かんこと

未代までの無念なり  
光俊やがて大音聲  
天王山を取切りし  
いざ光俊が一期の名残り  
味方の勇氣勵まして  
巴戸字に切り靡け  
鬼神不思議の働に  
浮足立ちし潮合さ  
サツと計りに乗りぬけて  
馬は忽ち飛ぶ如く  
ザンプと計り躍り入る  
騎手は固より古今の達者  
神か人かと見るばかり  
眼の限り一碧の  
緋絨着たる左馬之助  
無双の名人永徳が  
墨繪の龍の陣羽織  
或は緩に又急に  
馬疲るれば人助け  
左しにもに廣き湖を  
追手の勢は氣を取られ  
あれよく云ふ計り

一と當て當て、返さばや  
己れ秀正來りしか  
武略は遠の敵なるぞ  
後の世に語りつがせん者共  
吶さばかりに突きかゝり  
西に東に出没し  
左しもの大敵もて餘し  
此處と見て取る軍の呼吸  
一息呑みし掛聲に  
名に負ふ近江の湖に  
馬は天下の逸物なり  
眞一文字に乗り切る様は  
水や空空や水  
波を蹴立つる大鹿毛に  
一際目に立つ武者振りに  
丹精籠めて盡きたる  
比良山嵐に翻ねし  
揚鞭振ふ勇ましさ  
人勞るれば馬に頼り  
事こそせざる不敵さに  
醉へるが如き心地して  
唯だ一筋の遠矢だに

射懸けん人もなかりけり  
濱のこなたに打上り  
愛馬の鬃撫で上げて  
如何に大鹿毛承はれ  
半ば汝が勳ぞ  
命と俱に殺さんば  
天晴汝は存命で  
修羅の巷に馳せ廻り  
我が武名さへ後の世の  
やよ大鹿毛よ心得しかこ  
十王堂の柱につなぎ  
香の包を押し開き  
明智左馬之助光俊  
筆太々々書き残し  
城を指してぞ引き上げし  
憫れ桔梗の花枯れて  
此の大鹿毛は秀吉に  
いと珍重に召されたり  
花と譬へて幾千代の  
飛彈の山より尙高く  
留めて語るぞ目出度けれ

光俊やがて唐崎の  
馬物の具に水はしらせ  
哀別離苦の泪聲  
光俊多年の武勇の譽  
斯る名馬を光俊が  
いとく惜しき心塊こそすれ  
武勇勝れし主を取り  
流石は明智が馬なりこ  
武邊の語りに残せかし  
眞心こめて云聞かせ  
都て墨汁を取り出し  
天正十年六月十日  
此馬を以て湖水を渡る者也  
悠々として坂本の  
意の内て優美なれ  
五三の桐の世となれば  
日本一の名馬ぞこ  
舊主の名さへ武勇さへ  
朽ちせぬ譽今の世に  
琵琶の湖琵琶の音に  
傳へて語るぞ目出度けれ

臺灣入

皇の御稜威は四方に輝きて  
 臺灣島を献上し  
 君が御代こそ目出度けれ  
 龍車に向ふ蟠螂の  
 征討の師をぞ遣はさる  
 御渡海召されしは  
 金枝玉葉の御身なり  
 幕營ありし其跡に  
 炎熱焼くが如き日も  
 馬にも召さず越に給ひ  
 濡れにぞ濡れて進まる  
 病兵さへも立上り  
 諸所の砦に籠りたる  
 雨か霰か白雪の  
 砲煙暗く天を覆ひ  
 宮は矢石を犯しつゝ  
 川村少將兒王大佐を初めこし  
 我れ先にご奮戦し  
 賊兵之に氣を吞まれ  
 降参する者數知れず

清國遂に和議を乞ひ  
 合戦茲に治まれる  
 臺灣島の土賊共  
 斧を揮ふご聞へしかば  
 近衛兵の精銳を率ゐて  
 陸軍中將大勳位北白川宮にて  
 三貂角の御上陸  
 木を削りてぞ記さるゝ  
 三貂大嶺の險阻をば  
 大雨頻りに降る時も  
 士卒之に感激し  
 命を惜まず進撃す  
 賊兵共の射出す彈丸は  
 降り注ぐが如くにて  
 百雷の等しく落つるに似たり  
 突貫せよご下知あれば  
 勇み立ちたる近衛兵  
 賊の本營に衝いて入る  
 右往左往に逃げ散りて  
 大砲小銃の戦利品

山を築かん許りにて  
 宮は此時悠々こして  
 斯くて六月十日には  
 七月新竹を占領し  
 彰化臺灣兩府を定め  
 臺南指してぞ進まるゝ  
 地嶮くして糧道絶へ  
 宮は士卒ご食を分ち  
 夜は荒野に露營して  
 唯國の爲め君の爲め  
 御痛はしや悲しやな  
 餘り艱苦を積ませられ  
 日々に重らせ給ふにより  
 都へ歸らせ給ふ様  
 宮はイツかな聞こし召さず  
 賊徒平定を見ぬ中に  
 我のみ士卒を打捨てゝ  
 駕籠に召されて進まるゝ  
 賊徒平定ご聞こし召し  
 唯萬歳ご一聲叫び、し計にて  
 傳へ聞く日本武の古事を  
 國中の民も兵も

勝鬨ごつご舉ければ  
 基隆城へぞ入らせ給ふ  
 臺北城を陥れ  
 明くる八月には  
 十月の初めつ方  
 天暑くして瘡瘍多く  
 千辛萬苦の其中に  
 晝は汗馬に鞭を揚げ  
 戎衣の袖に月を宿し  
 平定の策を回らし給ふ  
 竹の園生の御身にて  
 遂に御病に罹らせ給ふ  
 御供の人々打驚き  
 切に御諫め申せごも  
 我れ官軍の將ごして  
 例へ臺灣の土ごなれば連  
 争でか都に歸らんご  
 御臨終の其際に  
 宮は莞爾ご打笑みて  
 敢なく天に昇り給ふ  
 今日の前に見まいらせ  
 慟哭せぬはなかりけり

去ながら昨日今日とは思ねど  
たゞ人は名こそ惜けれ皆人は

老少不定に貴賤なし  
名を千歳に

臺北融々仁政成  
旭光將被臺南地

皇軍到處湧歡聲  
殲彼渠魁安蒐生

宮の謠ひ給ひし如く

盛功偉烈後の世に

輝き渡るぞ有難き

北白川の水は逝きて歸らね

月影永く澄み渡り

光は世々に流るらん

光は世々に流るらん

小督

頃しも秋の半の空

詠め勝なる御袖の

涙の露を拂はせ給ひ

宿直に待らふ

彈正の大弼仲國を召され

如何に仲國

小督の行衛を知りたるか

内裏を逃出しより

嗟峨の邊りに聊の

知邊便りて在り聞く

汝如何にもして尋ね出で

此文傳へよこの仰なり

仲國つくづく思ふ様

嗟峨のあたりご許りにて

主の名をだに知らずして

尋ねん様はなけれども

小督の殿は世にも知られたる

琴の上手におはすれば

今宵最中の月影に

君の御上御ほし出で

一曲をだにしらへ給はぬ

事はよもあらじ

兎にも角にも尋ね出で参せて

叔慮を休め奉らんご

心に思ひ定めつゝ

畏りぬごさこへあげ

やがて御前を罷り出で

寮の御馬に打乗りて

隈なき月に鞭を揚げ

牡鹿鳴く此山里と詠じけん

嵯峨野の奥に分け入れば

さらめき渡る白露に

尾花が袖も打ちしめり

鳴きかはしたる蟲の音に

浮世の善悪も思はれて

獨り心を痛めつゝ

家有る毎に立寄りて

問へとも知るもの更になし

如何はせんご駒をたて

茫然としてありつるが

若し寶林寺にやおはするご

龜山近く至りしに

しづけき遙に聞へたり

峰の嵐か松風か

尋ぬる君の琴の音か

ごめつゝ行けば一村の

松の蔭なる片折戸

内に聞ゆるつま音を

手綱ゆるめてつくづくご

聞けば誠や月花の

御遊の筵に侍へりて

笛の役仕うまつりし時

聞き覺へつる調べにて

殊更曲は想夫戀

扱はまされもあらじごて

腰より横笛ぬき出で

少し許り吹き鳴らし

やがて駒より飛び下りて

門をほごくご叩き

是は内裏より仲國御使に参りたり

明させ給へ明させ給へご訪に

琴彈さし靜返つて音もなし

稍ありていたいけしたる

小女房門をほそめに明け

顔許り差出して

怪しの賤が伏せ庵に

内裏より御使なご給はるべきにあらじ

門違ひにや侍らんご云ふに

仲國及まじいにいらへしては

門さゝれんご思ひければ

是非なく押明けて内に入り  
何ぞて斯る處には御渡候ぞ  
つやく供御も聞召さず  
ほごく御命も

かく申さば

御消息を参らすれば  
暫し言葉も涙の雨に  
仲國も坐にせき来る涙を押へ  
表の衣絞る許になりけり  
女房の装束一重  
君にも左こそ待詫て在すらん  
待たせ給へと言ひ捨て、  
ありし次第を残りなく  
秋の長夜も明にけり

吉野落

美よし野の

もみぢ葉も

さそはれて

増して哀に思ふなり

天弘三年正月に

妻戸の椽に進み寄り  
君には明暮れ思召沈ませ給ひ  
打さけ御寝もならせ給はず  
御覺束なふこそ見給へり  
うはの空にや在すらん  
あらなつかしや御文顔に當給ひ  
晴れたる月も曇るらん  
兎角慰め参らせつゝ  
稍ありて御歸りこそ引結び  
給はりければ肩にかけ  
重ねて御迎に参るべし  
駒や早めて立歸り  
奏する程にはのくこ  
秋の夜長も明にけり

吉水經和作

花も立田の

夜半の嵐に

あだに散り行時はまた

茲に二階堂道瀝は

六萬餘騎を従へて

大塔の宮の日頃より  
吉野のに攻寄する  
吉野のかたを見上れば  
深山おろしに打なひき  
鏽を敷くに異ならず  
山嶮らして昔滑かなり  
必死になりて攻ることも  
たやすく落つべしともおもはれず

かゝる所に

兩陣鯨波をさつと揚げ

互に勇氣を振ひつゝ

かしこの峰に

射手を揃へて散々に

寄手の兵は

親討れても顧みず

かばねを乗越々々七日があひだ

息をもつかず攻戦ふ

屍は路頭に横たはる

寄手の案内者

足輕共に下知をなし

木の根岩角攀上り

鯨波を作りて攻ければ

籠らせ給ふ大和なる  
菜摘川のほごりより  
白旗赤旗錦の旗  
雲か花かごあやしまれ  
峰高ふして道細く  
幾千萬の銳兵が

同十八日卯の刻より

敵攻のほれば攻おろし

こゝの谷

走せ散りて攻合ひ開き合ひ

射立たれど

命を知らぬ坂東武士

主倒れても取あはず

血は草芥を染め

かゝる所に

岩菊丸は

金峰山の嶮を越へ

在所在所に火をかけて

城兵も今は前後の敵を防ぎ兼



自害する者もあれば猛火の  
向ふ敵と引組で差ちがう  
宮に注進する者もあり  
死骸を以て埋めたり  
赤地の錦の眞垂に  
龍頭の甲をめさせられ  
長刀を  
兵ものどもを二十餘人  
群る敵に切て入り  
東西を打拂ひ  
茲を専途と戦ひ給へば  
此二十餘人に切立られ  
散る如く  
宮は是より藏王堂の  
引揚給ひて軍兵と  
此戦に  
七筋の矢に貫かれ  
頬先きこ二の腕に二箇所の突疵負せ給へど  
立たる其矢も抜給はず流るゝ血汐も拭はせ給はず  
敷皮の上に立ながら  
傾け給へば木寺相摸  
敵の首をさし通し

中に走入て死するもあり  
者もあれば  
大手の堀は忽ちに  
宮は此よしをきこし召し  
緋緘の鎧着て  
三尺五寸の  
小脇にはさみ屈竟の  
前後左右に引給ひ  
砂子を飛ばし煙を立て  
南北へ追廻し  
寄手の大勢も  
風に木の葉の  
四方へ颯と引にけり  
大廣庭に悠々こ  
最後の御酒宴をぞ遊ばされ  
宮の召したる御鎧は

大盃を三度まで  
四尺三寸の太刀先に  
宮の御前に畏まり

聲高らかに謠ふやう戈鎗劍戟を降らすこ  
電光の如く  
盤石山岩を飛すこ  
天帝の身には近づかずこ  
漢楚の鴻門に  
劍を抜いて舞し時  
幕をかゝけて項王を  
斯やと覺ゆる斗なり  
餘りはけしく戦ひて  
飽なかの節や袖ずりの  
枯野に残る  
其矢を抜くに暇なく  
一の木戸は早破れ  
連日の戦に  
迎も籠城覺束なし  
早く落させ給ふへし  
召させられたる直垂や御物の具を頂戴し  
御諱をも犯し参らせん  
忠義面にあらはれて  
宮はあはれに思召し  
死なば所をかへすして  
かんばしき  
義光聴もあへず

急雨の如しこいへども  
太刀振かざし舞たるは  
楚の項伯と項莊と  
樊噲庭に立ながら  
睨みし勢ひも  
茲に村上彦四郎義光は  
敵に矢十六筋を射付られ  
ふしより打て立たるは  
玉萩の風になびくが如くなり  
宮の御前にひれ伏して  
今二の木戸にて支ふれど  
軍兵共は打死し  
敵四方を圍まぬ中  
臣は恐れ多きこながら  
茲に戦死を仕らんこ  
いと懇に申上れば  
争かて去るここのあるへきぞ  
吉野の山に  
名を残さんご宣へば  
嗚呼淺間敷仰せかな

昔漢の高祖が  
紀信高祖の眞似をなし  
高祖は是を許したり  
天下の大事を能くも  
早御物の具下し賜れど  
解まつれば  
御鎧の直垂も  
義光に手づから渡し宣ふやう  
我若し生伸たらば  
又打死なしたらば  
是今生の別れぞ  
涙ながらに落させ給ふ  
木戸の櫓に走せ上り  
我れは是れ神武天皇より九十五代  
後醍醐天皇第三の皇子  
逆臣ばらに惱まされ  
只今自害する所なり  
身に備へたる武運つき  
手本にせよと呼はりて  
錦の直垂に練貫の  
兩膚脱て一刀を  
眞一文字に引廻はし

楚陽に圍まれし時  
楚や欺かんご乞たりしに  
是らの御覺悟めらせられずして  
思したつれたり  
御鎧の上帯を  
宮も實にごや思しけん  
脱がせ給ひて  
汝が後生を吊らはん  
同じ冥土に伴ふべし  
言葉すへなく宣ひて  
義光もせきくる涙を押へつゝ  
大音揚けて名乗るやう  
一品兵部卿尊仁親王なり  
恨を泉下に報いんため  
これを見て汝等が  
腹を切らん其時の  
鎧を脱て投げ落し  
二重小袖を引くつろけ  
左の腹へぶつこ立て  
あけに染みたる腹を

櫓の板に投付て  
伏して果てたる義光が  
敵兵是を見て  
御自害召されたり  
いふまゝに  
櫓の下に馳せ集る  
天の河へと落給ふに  
敵五百餘騎道をさへぎりければ

太刀先くはへうつ伏しに  
最後の様こそ勇しけれ  
大塔の宮は  
御首給はらんご  
四方の圍を打捨て  
宮は是ご引違へ

義光の一事  
父が教に従ひて  
追くる敵の馬の諸膝  
平頸打ては勿落し  
左へ蹴倒し  
猛虎の如くたけりたり  
五百餘騎を引受て  
いかに義隆強の者とはいへ  
身鐵石にあらざれば  
薄手の疵は數知れず  
こある竹村に走せ入りて  
高野山へ落ち伸び給ひしは  
花ご散りにしそのいさを  
あかき心によるごかや

村上兵衛藏人義隆は  
一人茲に踏ごままり  
難ては切りすへ  
右へ突のけ  
飛鳥の如く飛廻り  
九折なる細道に  
半時ばかり支へしが  
深手の矢疵十餘か所  
今は是迄ごや思ひけん  
此隙に宮は虎口を遁れ給ひ  
村上父子が美よし野の  
立田の秋のもみぢ葉の  
あかき心によるごかや

阿新丸

初段

吉水經和稿

日野中納言

後醍醐帝の密旨を奉じ

大御心をやすめんこ

茲に土岐の頼員は

一味の誓たてながら

ある夜のむつでこに

事たちまちに六波羅へ

しばしも猶豫なさはこそ

遠處鳥根に流しけれ

資朝卿の御子阿新丸は

仁和寺あたりの隠れ家に

無常を深くかこちつゝ

指折りかぞへ待給ふ

長崎高資の言葉を容れ

佐渡の守護本間山城入道に下知をなこ

資朝卿を殺さんといふ

企を傳へ聞く

阿新丸は此時十三才にてまかせせ

想を思はず眞でゝろは

なき數にいな父上の

藤原の資朝は

北條高時をほろぼして

思ひこらし給ひけり

この資朝卿と

妻に心の引かれて

くちばしりしが基にて

洩れ聞ゆしかば高時は

資朝卿を佐渡といふ

いたはしや

世にもかしこき母君と

住せ給ひて世の中の

またの逢瀬をたのしみに

其甲斐もなく高時は

巖も通す桑の弓

其御最後を見届けて

共に冥土の旅枕

突然母君に此事を

聲ふるはして涙ぐみ

御父君につれなくも

御身獨りを此家の杖柱とも思へるに

今又御身と別れては

生ながらふへくもおもほねず

ましてや佐渡とやらんは人も通はぬ

怖ろしき離れ箱根ごきこゆるを

幼き御身いかして

思ひこゝまり給へよこ

涙の雨に打ちめり

こほるばかりに成にけり

恩愛深き母様の

又父上の御最後に

嗚呼母君に仕へんか

いづれにしても兩親に孝を全ふする事は

逆ても叶ぬ此身なり

御詫申す外はなしこ

思ひ詰めたる有様を

疾く見そなはし

又憂目をや見るならんこ

結ばん者と思ひたち

明し給へば母君は

わすれもやらぬ去年の夏

別れまつりこ其後は

此母親が

行へき便りのあるべきぞ

宣ふうちに御聲は

きぬの袂もみるうちに

阿新丸はきこしめし

仰せに背くも不孝なり

おくれ申すも不孝なり

御父君をいかにせん

今宵のうちに自害して

幼な心の一筋に

此方にいます母君は

此上に痛ごめなば眼のあたり

思ひかへしてさきくは

兎にも角にも阿新が  
ころろさく中間を

隠家を

見送くる慈母のかなしみは

なかく

昔時めく御家も

あらぬ歎きを

はきも習はぬ草鞋に

露はおかね草枕

心の中こそ殊勝なれ

船にめされて海原の

佐渡の國にぞ着給ふ

本馬が館におこづれて

阿新丸といふ者なり

逢ひ見ん者こそ玉敷の

足引のけはしき山も海神の

いかな浪路も憚からず

罷り下りし哀れさを

ゆるし給はんこ懇ろにくりかへしつゝ宣へど

本間なかく聞入ず資朝卿を入をきし

半屋のうちを

此方なる持佛堂にぞいれにける

望に任せおかんこて  
差添へられて  
出でます君がうしろ影

筆につくされず

今は乗るべき駒さへも

打捨て

菅の小笠を傾けて

思はぬ旅に出給ふ

やがて越前敦賀より

八重の沙路を打渡り

便る家こてあらざれば

某は日野中納言資朝の二子にて

父が此世にいますうち

都を出で

はるく越て此佐渡に

聞きわけられて對面を

目の前に僅隔て

さこしめされて打しほれ

葉がくれに

夢に見もせん逢ひもせんこ

餘所の見る目も哀れなり

鐘の響こ諸共に

資朝卿は此事を

生きて逢事叶はずものまかは

死して干草の

獨りまろびておもひ寝の

悲しみ給ふ御姿

扱も日西に入相の

行水を奉れば

資朝卿はきらるゝ時になりぬこて

用意の駕籠にぞめされける

爰より十丁許りを隔てたる

さびしき河原のありけるが

程よき所に人夫らが

資朝卿憶し給ふ

辭世の頌をぞかゝせ給ふ

四大今歸り空

截断一陣風

日野中納言藤原資朝卿こ

河原のあしに身を焦す

さつこ散りてぞうせにける

やゝありて御なきからを阿新丸に奉れば

阿新丸ひと目見給ひて

嗚呼情なき本間かな

駕籠を昇きすへて控ゆれば

氣色なく敷皮の上に居直りて

五蘊假成レ形

持首當三白双

其奥に嘉曆之年五月二十九日

記させ給ふやいなや

螢の影は太刀風に

足もこなへて倒れなし

海山越へてはるく

来りし我につけもせず  
かへすくも口をささ  
しばし人目も憚からず  
實に理り知られけり  
無念の涙押し拭ひ  
其なきがらを守らせて  
御身はあまたごまりて  
是こそ深き所存のある事ご後にぞ思ひしられける

阿新丸

二段

去程に阿新丸は  
晝は病ご偽りて  
床に臥してぞ  
夜は起かに起いで、  
隙もあらは親子の中  
腹を切らんご思ひ詰め  
或夜雨風烈しくて  
おもしく寝ねければ  
勇む心を押しづめ  
本間が運や強かりけん  
猶奥深く忍び入り  
奥にあたりし燈火の

其鬱憤を晴さんご  
旋の衣を敷妙の  
忍はるゝ  
本間が寝やを伺ひ給ひ  
ひごりたりとも刺殺し  
しのびくおわせしが  
番の者共油断をなし  
願ふ所の幸ひご  
そつご伺ひ見給ふに  
常の臥床をかへたれば  
探し給ふに二た間なる  
影明らかに見へたれば

板戸の外に身をちぢめ  
目指敵にあらずして  
本間三郎にてありければ  
案内なれご是もまた時にこりての敵なり  
主の入道に優るごも  
二足三足ずみより  
素より腰に太刀はなし  
千にひとつも目をさまし  
いかはせんご腕を組み  
折節夏の事なれば  
影を慕ひて飛來るを  
障子を少し明給へば  
あたりまばゆき燈火の光は終に虫のため  
消へて跡なくなりけり  
彼れが所持なす一刀を  
首落さんごし給ひしが  
死人を斬るに異ならず  
足踏ならし立掛り  
音に驚き起き上る  
臍の上より疊まで  
力にまかせ指通し  
心のまゝに掻き切て

首さしのばし見給ふに  
資朝卿を斬りたりし  
よもや劣りは致たさご  
息をこらして立給ふ  
殊に燈火明ければ  
聲立られては一大事  
案じ煩ひ給ひしが  
蛾ご云ふ虫が燈火の  
内にいれんご思ひつゝ

仕濟したりごおもひつゝ  
取るより早く抜き放ち  
寝たる人を打んごご  
目を覺させて刺さんごて  
はたご蹴放す小枕の  
本間が上にまたがりて  
柄も拳も通れよご  
返す太刀にて喉笛を  
後ろにあたる竹村の

中を目掛けて静々こ  
實に雄々敷で見へにける

驚かされて狼狽し  
馳集りて燈火を  
幼き人の足跡は

いざ打取らんと松明を  
探がせど影も認め得ず  
自害せんとは仕給へど  
身の上なれば

帝の御馬前に功名手柄あらはして  
父の宿意を達しなば  
思ひ返して降る雨に  
濡れてなびける吳竹の枝にすがりて

ゆうくく高き梢によぢのほり  
目に餘りたる大堀を  
起て鳥羽玉の夜はまだ深きうしらの

ころほひなれば幸いこ  
たどり給へど夏の夜は  
雲のいづこに月やとるらん

見あらはされぬ  
深みが中に身をかくし

隠れ給ひし所業は  
番の者は此おこに

さるものもこりあへず  
燃して見ればこはいかに  
阿新殿に相違なし

かざして庭の隅までも  
阿新丸は人手に渡らぬ其先に  
まださきくくに望みある  
今茲を遁れて

是こそ忠臣孝子なれど

やすく

磯部の方を心がけ

また宵ながら明けぬるを

其隙に麻や蓬の茂りたる

追手を遁れ給ひけり

又忍び出行給ふ

はたご行逢ひ

事の仔細を宣へば

御心やすく思召せし

肩に搔乗せ足早に

今もや船の出なんとするを

櫓權を立て、漕出す

柿の衣を結び揚げ

いらたか數殊をさらく

秘密の呪文を唱へ

權現

天龍夜叉

其船此方へ返し給へ

躍り揚りて祈りければ

覆がへらんとするありさまに

手合せ膝をかめて伏し拜み

山伏の御房助け給へ

其念力や通じけん  
俄かに逆風吹返り逆巻浪に大船も

肝膽を砕きつゝ

金剛童子

八大龍王

音もはけしく押揉みて

明王の本誓誤らずば

山伏大に腹を立て

いたく老たる山伏に

しかく

山伏聞て哀れに思ひ

足も撓める阿新丸を

行けば程なく荒磯の浪打みぎは

遙の沖を見渡せば

船を渚に漕戻す  
阿新丸を助け揚げ  
屋形の中に入れれば  
船は港を出にけり  
百四五十騎馳來り  
皆同音に呼はれど  
走せ行船の事なれば  
船は其日の夕まぐれ  
嗚呼阿新丸の眞心は  
光りと共にあかねさす  
かゝやけり

澤陽江

左こそあらめ山伏は  
水主の乞に任せつゝ  
波風忽ち静まりて  
此時きのふの追手共  
其船戻せし鞭を揚げ  
順風に帆を揚て  
見るく影も消へうせて  
越前の府にぞ着にける  
天のみそらの月と日との  
我日本に  
我が日の本に輝やけり

高崎正風作

紅葉うつろひあしがちる  
澤陽江の夕まぐれ  
別を惜む盃の數重なれど  
淋しさに  
影遠白き波の上の月打まもる折しもあれ  
忽ち聞ゆる琵琶のおこ  
互に心さきめきて  
忘れ果てつゝ

秋のあわれのいと深き  
友の舟出を送り來て  
絲竹のしらへも添はぬ  
本意なき事こおもひ  
おもひもかけぬ事なれば  
歸らん事も行く事も

其音を尋ねて誰ぞこ音なへば  
打ひそまりて答なし  
酒を添へ  
又更らに  
琵琶のあるじを招けども  
百千度  
しぶくりに  
琵琶を抱きてまばゆけに  
いひしらぬ深き情のこもりつゝ  
ひさゆくまゝに  
おのが心のうれしさを  
人こそしらぬ濱ゆうの  
積るうらみの數々を  
かろく打ゆるくひねり  
かゝけつ  
後には六么を弾じけり  
嘈々として村雨の如く  
私語事に似たり  
こきまぜて  
間關たる鶯の聲  
泉流水早瀬を下る  
絲絶へしはし聲なき其程は

舟漕ぎ寄せて  
燈かゝけ  
宴の筵を打開き  
頓にはいで來ず  
呼立られて  
こなたの舟に移り來ぬ  
面を掩ひ弾初めし其撥音に  
つねの  
訴へ出るこゝちせり  
百重かさなるうきおもい  
四筋の糸にいはすらん  
はらひつ  
初めには覺掌をかなで  
大弦は  
小弦は切々こしで  
切々嘈々こ  
彈ば大珠小珠玉盤に落つ  
花陰に滑かに幽咽たる  
水泉冷澁の趣凝りて  
そゞろに憂を催して

聲有よりも  
 風情を添し折しもあれ  
 銀瓶碎けて水送り  
 刀稜を削るに髣髴たり  
 撥を収めて四つ緒を  
 さながら帛を裂くをこし  
 た、悄然と聞惚れて  
 秋の浦御身にしみて  
 月の影にぞ更けれ  
 語る詞も口籠りて  
 蝦蟇の陵下の産にて  
 琵琶の上手と世に知られ  
 金を敷ける臺にも  
 かなたこなたの會にも  
 さ、めさかはし綾錦  
 身も榮へつゝ世の中は  
 思ひ頼みて花の春  
 日を経るほどに同胞は  
 夕去き朝來りて  
 杉の門  
 世渡るたづき盡はて、  
 手のまに／＼誘はれて

中々だ  
 再び響く撥の音  
 軍起りて打物の  
 曲も今はとなりし時  
 只一聲にかきなせは  
 東の舫も西なるも  
 物云ふ人もあらばこそ  
 水底白く澄渡る  
 衣をつくろは居なほりて  
 妾らはも本は都なる  
 十三歳の頃よりも  
 玉を飾れる宮の内  
 召のはせられ遊士の  
 招き寄せられ戯れ合ひ  
 かつぎかへれば家も富み  
 かくある者とおろかにも  
 紅葉の秋と等閑に  
 親族に離れ  
 かほ花の盛もいつこ  
 馬も車も寄來ねば  
 身も浮草の根をば絶へ  
 情も淺き商人を

夫とずるだにはかなきを  
 此浦舟に夜を守る  
 更行まゝにまどろめば  
 いこゝ悲しき増りぬこ  
 ふこきたためいきつくこ  
 琵琶を聞だに悲しきを  
 始めて逢る此人と  
 我も同じく浮沈み  
 潯陽城のかたほごり  
 いぶせき中に家居して  
 高嶺の猿杜鵑  
 吹鳴す笛のこゑばかり  
 やまいいやます心地して  
 音なつかしく思ひしに  
 天津乙女の音楽を  
 いなむここなく今ひこつ  
 歌をつくりて送らんこ  
 又も彈ずる撥音は  
 物凄ければ江州の  
 並居たる人も袖をぞこほりける

其夫遠く旅立し  
 月明かに水寒むみ  
 吾身の盛り夢に見て  
 語るを聞ておもはずも  
 此物語りの哀れさよ  
 身の際こそはかはれども  
 去年より茲に流離て  
 あしこ竹この生じける  
 且夕に聞く者は  
 樵夫の歌や總巻が  
 返りて胸を痛めつゝ  
 むかし聞つる絲竹の  
 今宵の君が琵琶の聲  
 聞く心地していこうれし  
 弾てきかせよ予も又  
 いへば實にもと思ひけん  
 前の聲よりいそがしく  
 司馬はさらなり



雲のまひさ

吉水經和作

國の爲には身を忘れ  
頼三樹三郎は

月や花には意もこめぬ  
幼にして

父を失なひ其母に

育られつゝ人となり

十七才にて浪花なる

後藤松蔭に従ひて

文の林や奥深く道より道に分入りて

高き其名は天地に

吾妻に遊ぶ程もなく

嘉永六年亞米利加の

響き渡りし人なるが

碇おろし、其日より

使節浦賀に渡り来て

いと騒しく思はれて

磯打浪の響すらも

鼎の湧に異ならず

皇國の内は恰らに

糧に乏しき此都

三樹三郎思ふやう

いさまづ糧を求めんこ

若しも軍の起りなば軍兵共を初めこし

謀りし事も鳥が鳴く

人皆飢に及ぶべし

盡す心は鴨川の

同じ心の人々に

三樹三郎牙をかみ

吾妻の司に支へられ

持ちたる筆を突き碎き

水の泡ご成にける

早此時はかけまくも

「其罪は君が代思ふ真心の深からざりしなりけり」

墨黒々こ書流し

天をにらみて立あがる

かしこきあたりは浦々の港を鎖しるみしらを

追ひ拂はんこ唱へられ

幕府は彼が請を容れ

かたみに市を開かむこ

いひ争へば公論は

二ツに別れ夏の日の蟬の聲よりかまびすし

われ劣らじこ波を蹴り

露英其他の強國も

今は猶豫もなしかねて

押寄せ来れば三樹三郎

夜晝こなく討幕の

栗田口の親王に

小簾間洩るゝは月花を

事を細かにすゝめしが

吾妻の司いち早く

かたらふ聲にあらずして

三樹三郎は途すがら

からめこりてぞ江戸に送る

「かへり見る比るの山影曇りけり我行先は白雲のそら」

都を離れ山駕籠に

口吟つゝなれく

嗚呼曇りなき大空の

かゝれ行こそあわれなれ

霞にかくれ

月の光もこもすれば

時の間ぞ

かくばしき花のさかりも

散るぞ浮世の習ひなる

夜半の嵐に誘はれて

運拙くて囚人の

三樹三郎も今は早や

我日の本の行すゑを

數には入れど真心は

涙は袖に降雨こ

おもひくゝて玉こ散る

乾暇さへなきうち

共懸りて旅衣

「當年意氣欲凌雲」

いつか箱根になりぬれば

快馬東馳不見山

今日遞途春雨冷

附き添ふ人も恐れつゝ  
越ることもなく越にけり  
吾妻の方に着ければ  
よく／＼罪を問ひ糺す  
我は父の遺訓を守り  
志をばいだくのみ  
早く眠を醒さずば  
すめらみ國を清めむと  
文天祥が其むかし  
斯くありけむと思はれて  
『足引の山もさくへき聲すなり  
云へる心も目の前に  
扱此人をゆるしては  
虎を放つに異ならず  
扱手も早き太刀先の  
淺茅が原の草の葉に  
三郎容を改めて  
『排雲欲手掃天災  
井底痴蛙過憂慮  
身臨鼎鑊一家無信

四十四  
檻車搖夢渡函關

吟ずる聲の雄々しさに  
名に逢ふ關もこころなく  
隙行駒の足早く  
獄吏きびしくいましめて  
三樹聲をはけまして  
只一筋に勤王の  
汝心に願省て  
たちどころにほろほして  
諫め争ふ其聲は  
折れず撓ぬ勢ひも  
八田知紀が詠じたる  
月の桂もいまか散るらん  
見る心地して勇ましき  
風もそよがぬ武藏野に  
こくなき者になさんて  
閃くさまは冬枯の  
おく霜よりも尙ほ白し  
都の方を伏し拜み  
失脚墜來江戸城  
天邊大月飲光明  
夢斬鯨鯨劍有聲

風雨多年苔石面

吟じ終るや神無月  
たくひならねど大丈夫が  
ころは安政つちのこのひつじ  
十月七日の事なりき  
照る日も爲めにかきくもり  
さへたる月も光なし

誰題日本古狂生

時雨に染みし紅葉の  
散りて行くこそかなしけれ  
惜むべし年は三十五

蓬萊山

愛度や君の恵みは久方の  
不老門を立出て  
峰の小松に維鶴住みて  
君が代は千代に八千代に  
苔のむすまで  
破らんこいへば又  
千秋萬物五穀成就して  
下には民の籠を厚くして  
蓬萊山こは是こかや  
替らぬ御世の例しには  
弓は袋に劍は箱に  
鳥も中々驚く様をなかりけり

光り長閑けき春の日に  
四方の景氣を詠むれば  
谷の小川に龜遊ぶ  
小石の巖となりて  
命在存て雨堆れを  
堯舜の御世も斯やあらん  
上には金殿樓閣の藁を並べ  
仁義正しき御世の春  
君が代の千年の松は常盤色  
天長地久に國も豊に治まりて  
藏め置く諫鼓苔深くして

迷悟もこそ

迷ふが故に三界は暗らし  
 十萬世界も廣くして  
 佛も淨土も他にあらず  
 唯其儘の姿にて  
 慈悲より外に宿心はらし  
 言葉は殘せ  
 いつも人には情あれ  
 回り回りにて小車の  
 悪まるゝ人には猶もよくし見よ  
 後には深き友達なる  
 されば古人の言葉にも  
 大海は塵を撰ばず  
 我が善きに  
 友は鏡なる者ぞかし  
 何處の里にも住よかるべし  
 何皆人は  
 我力我心を拂ひ捨て  
 脱け果てたる身こそ安けれ」

一心覺れば  
 地獄も餓鬼も我に在り  
 佛は何を岩間の苔衣  
 唯何事も腹は立つとも  
 言葉少く品多くして  
 情は人の爲ならず  
 後は我身に報ひ來る  
 仁者に敵ばなしこかや  
 聖人は人を譏らず  
 善悪は友にぞよる  
 人の悪きはなきものよ  
 老も若も悪き心を捨てし見よ  
 我知我慢  
 彌陀頼む心は西へうつせみの

春のしらべ

島津久光公作

新玉の年の始め壽や  
 笛と鼓の音までも  
 玉だれゆらく風たちて  
 神の井垣の老松も  
 うべも太夫も影高く  
 常盤の色ぞたくひなき  
 和泉式部のゆかりこや  
 ふみゝる袖にうつりくる  
 又高砂住の江の松に  
 いもせの契り末長き  
 四方の海原浪なきて  
 枝をもつらね御代の春  
 萬歳樂には  
 今日汲かはす盃に  
 松ばやしこそめでたけれ

昔かはらず吹きあぐる  
 春の調べに聞へつゝ  
 舞の袂も長閑なる  
 枝をもつらね葉をかさね  
 齡を君にゆづる葉の  
 軒端に咲ける梅が枝も  
 床しくかほる窓の中  
 好文木の名に耻ず  
 相生の尉さうば  
 千世の例しにひかれつゝ  
 吹くもしづけき時津風  
 千秋樂には民を撫で  
 命を延る樂も年ごこの  
 君ご御國を祝ふなる

千早振

榎原繁調曲

千早振

神の御代より

○春のしらべ、千早振

吳竹の世々にも絶えず  
 思ひ亂れて五月雨の  
 山廓公啼をここに  
 唐崎龍田の山の紅葉ばを  
 すぐれくして 冬の夜の  
 猶消歸り年毎に  
 言をいへつゝ君をのみ  
 思ひ駿河の富士の根の  
 別るゝ涙ふち衣  
 ここのはここに皇王の  
 中につくすこ伊勢の海の  
 これりこすれど  
 猶新玉の年を経て  
 ひるよるわかずつかうこて  
 忍ぐ草おふる  
 降る春雨のもりやしぬらむ

怨みの雪

吉水經和作

四の緒に調べ合せて奏するも  
 いこど涙の種なる  
 今より七拾餘年前

あまびこの音羽の山の春霞  
 空もころろに小夜更けて  
 誰もねさめて  
 見のみの忍ぶ神無月  
 庭もはだれに降る雪の  
 時につけつゝ哀れてふ  
 千代に祝ふ世の人の  
 燃る思ひもあかずして  
 おれる心もやち草の  
 おはせかしこみまきくの  
 浦の鹽がい拾ひ集め  
 玉の緒のみじかき心思ひ合す  
 大宮にのみ久方の  
 かへり見もせぬ我宿の  
 いたまあらみ

昔し語を尋ぬれば  
 西のはてなる異國に

母子兩人りが雪のため  
 其母が空しく屍を埋めたる  
 あやめも別かぬ鳥羽玉の  
 はてもなきまでいこ廣き  
 空かさくらし降る雪ぞ  
 皆銀の世となりて  
 花をちらして木枯らしの  
 骨も砕けん許りなり  
 拂へど積る身の因果  
 唐も凍り手も足も  
 今は命も絶へくくに  
 助け給はれ神々よ  
 此兒は守り給へよこ  
 かはいよ我兒の身に纏ふ  
 焼野の雉子の翼なり  
 しるや知らずや稚子の  
 遠寺の鐘は何こなく  
 あくる朝に旅人が  
 其足もこに黒髪くろかみの亂れしまゝに子を抱き  
 ひごりの女倒れ伏す  
 花の姿は残れども  
 扱此夫は誰なるか

○怨みの雪

往來もならで其  
 いこもかなしき物語り  
 や、衣に道を踏たがへ  
 野原に迷を出しより  
 右も左も後や先  
 木々の梢は時ならん  
 音すさまじく身にしみて  
 玉ご散り来る傘の雪  
 次第々々に夜は更けて  
 かなはぬ時の神頼み  
 なりたる聲をしほりあけ  
 たごへ妾は死ぬることも  
 云ひつゝ着物抜こりて  
 雛を羽圍む夜の鶴  
 暖なりき母の恩  
 永の別れとなり響く  
 諸葉無常ご告渡る  
 雪かき分て行すぎる  
 立寄り見ればうつくしき  
 浮世の夢は痕もなし  
 聞かはさぞかしなげくら、

彼是思ひ合すれば  
落つる下より餘念なき  
我母なりやと思ひけん  
乳房を探ぐる其様は  
嗚呼母子のあはれさを  
なかばの月も曇りけり

富士山

吉水經和作

駿河なる富士の高嶺は昔より  
山てう山の大君の  
仰けば彌高く  
かぎりもならぬ大空を  
千とせの雪の白ぎぬを  
姿さだめぬ雲霧を  
いたゞきは  
大御稜威をかゝやかし  
大八州のかためとなり  
もろこしにかげをさし  
翼をこゝにやすめつべし  
數限りなふ重ねずば

涙は袖の關越て  
小兒は見上あけ打笑みて  
楓の如き手を出して  
胸も張り裂くばかりなり  
かたるまに／＼四の緒の  
なかばの月もくもりけり

世の人々にいづかれて  
見ればいよ／＼あざやかなり  
我きぬがさこいたゞきて  
八重九重にかさね着て  
あさな夕なに帯さなす  
空をしのぎて日の本の  
裳すそは外國に貫ぬきて  
古のさくら木は  
南に羽うつ大鷲も  
大比元小比元の山々も  
こてもこれにはならび得ぬ

往來の人も日數經て  
筑紫津輕に  
足高箱根かたへにさもらひて  
こころあるさきのたすけとなる

漸く麓を出るこかや  
眞名子をすゑて鎮めこし

怒りて災を吐くときは  
悦びて眉を開く時は  
或時は茄の子またらとなり  
六十餘州も  
五十三驛も是がために足輕し  
其名世界にしるくして  
詩歌をば  
棟木もためにおれつべし  
牛ごいへともあへくべし  
天さかる鄙の國々足引の  
姿は繪がき床にかけ  
しるしこなして夢にだに  
蒙むらむこをほりするは  
豈はおほろけの

千里の外に石を飛ばし  
萬戸の家に玉を降らす  
又ある時は逆しまの扇となる  
此がため寄重く  
はめたゝへたる  
積み重ねなばいこふさき  
ひかせたりんには勇壯の  
うち日さす都はいふも更なり  
山より山の奥までも  
君を祝ひ身を祈る  
其姿を見其すじを  
山ならめやも

國のほまれ

吉水經和作

いふふ事

おこなふ事の違ぬは

ひじりの外に誰かある  
 いひおくりたる其文は  
 其行ひに實を結び  
 中佐の君のひじりなり  
 五こせの春國たみも  
 我が紀元節の祝日に  
 徽章さらめく軍服を  
 研ぎ磨きたる真心を  
 ひかれて勇む凱旋の  
 都に響き渡りけり  
 ひづめを深く埋め來で  
 風はおもてを吹去りぬ  
 人影見へぬ野や山を  
 異郷の月に地圖を案じ  
 飢たる腹を忍びつゝ  
 やどりて虫に夜もすがら  
 艱難辛苦を共にせし  
 中佐は千々に手を盡し  
 薬を與へ水をやり  
 よろこぶ如き様なれど  
 彼がたてがみかさなで、  
 これに代るに烏拉云ふ

他郷に遊ぶ友だちに  
 言葉に花の咲きそひて  
 名をあめつちに蕪かす  
 頃は明治のはたちまり  
 外つ國人も祝ふなる  
 影も曇らぬ日本の本  
 つけつゝ帯ひし日本刀  
 もたる中佐のかさ出て  
 いなゝく聲は伯林の  
 のこんの雪はうつ高く  
 身を裂くばかり懐しく  
 ある時は  
 夜半こもいはず乗越て  
 又あるときは  
 見るもいおせき空家に  
 膚を刺され眠り兼ね  
 名馬は疲れ進み得ず  
 くすに乞ふて懇ろに  
 見るたび毎に凱旋は  
 こもないうへく非ざれば  
 涙ながらに暇を與へ  
 馬に乗かへ行先は

燃ゆるが如き夏の日を  
 玉なす汗はせをひたし  
 見る人恐れ聞く人も  
 病の多き村里を  
 さす熊蜂のほこささの  
 思ひし路を露はとも  
 花も實もある君が名を  
 皇后共に調を賜ひ  
 出立つさまの國々は  
 老も若きもおこなへて  
 尊き姫がしるしにて  
 肩にかくるぞ勇ましき  
 進軍の譜や君が代を  
 うちに送られ歸り來る  
 はまれのみかは其外に  
 世の爲になる寶ぞこ  
 まゆを開きて待にけり

避けんさすれど木蔭なく  
 このつく雨は身を洗ひ  
 身の毛のよだつコレラてふ  
 物ごもせずにつきこまり  
 するどき群をも切り抜て  
 たがへす越て日の本の  
 聞傳へたる露西亞の帝  
 午餐の榮を身にうけて  
 名だたる人を初めこし  
 市に送り野にむかへ  
 したしく贈る紀念の章  
 軍樂隊は我が國の  
 かなで、祝ふ其聲の  
 君がはまれは日の本の  
 齋す者は國の爲め  
 我國民がよろこびの  
 まゆを開きて待にけり

琵琶の徳

四竈納治作

長き夜をさへ短しこ

思ふ友さち打つとひ

心にかゝる雲もなく  
其名都に聞ゆるは  
席に列なる人々の  
四筋の糸の大絃の  
千軍萬馬入りみだれ  
必死に戦ふ勢ひも  
おもへば中絃又更に  
空に一聲ほとぎす  
微かに響く小絃の  
虫の音よりも懐かしく  
花に胡蝶の戯れて  
軽く打ては緩くなり  
無絃の琴の趣きは  
琵琶の音も思はず  
如何なる邪惡の鬼神も  
涙のみかは角も落ち  
是皆な歌の徳ならん

軍人の琵琶

去日迄君の御側に侍りて  
暫時の間も世の人の美むまで

晴れ行く月の影高く  
一の日毎の琵琶の會  
交るくゝに撥ならず  
嘈々たるはさながらに  
鏑を削り鏢を割り  
之には増じこ計りに  
帛を劈さく音に似て  
啼やしけん疑はれ  
切々たるは秋の夜の  
春の朝にのどけくも  
遊ぶが如き琵琶の撥  
聲なふして有が如く  
かくやと思ふ計りにて  
一度此を聞ききは  
腸さかるゝ心地して  
優しき人の數に入る  
是皆な琵琶の徳ならん

仙華作

花の晨や月の宵

君が技倆に撃てば鳴る  
士氣を鼓舞し又或は  
譽も徳もこれを皆  
昨日は今日の昔にて  
君を送りしこのかたは  
晝は南の空を仰ぎて  
夜は月に對へて  
思へや霽るゝ雲間より  
まどろむ暇の夢にても  
如何なる辛苦も厭ふまじ  
こ念ふ念の屈きしや  
召させられたる嬉しさは  
嗚呼我身をも一度は  
彈丸に貫かれて蜂の巢こ  
君の御側に隨へて  
これぞ我身の望れなり

叩けば響く吾身なれ  
鬼神さへも泣しめし  
善くする人のありて社  
征清の首途勇みぬる  
偕に語ふ人もなく  
翼ある鷹を恨み  
君が姿を映さんこ願ふ  
只た一聲不如歸  
相逢ふ事の叶へなば  
如何なる苦艱も恨みまじ  
今度君より音信れて  
譬ふものごとてなかりけり  
戦の場に勇み出て  
劍にさゝらこ削らるゝも  
國の助けこなるならば  
これぞ我身の譽れなり

征露の役我軍九連城を陥る

高島秋雨

我日本は往古より  
左れば弱きを援けつゝ

義を見て勇む習慣なり  
専横限りなき強者をば

○征露の役我軍九連城を陥る

膺してぞ世に示す  
輝かすぞ譽なれ  
歐羅巴なる大國露西亞は  
さきに我樺太島を略取なし  
我血を流せし遼東を  
今又東洋の要地たる  
猶朝鮮をも併呑せんご  
又甘言を以て清朝を欺き  
東洋の風雲穩ならず  
我國の安危に關ればこそ  
撤兵を度々促せども  
裏面には配る兵備をば  
遂に平和の破れとなり  
敵艦二艘を撃沈め  
敵唯一の力たる  
朝鮮國に陸兵を  
九連城を攻んとす  
最初の一戦に定まる  
我は議を凝し策を練り  
敵も左右なくば打て出ず  
脆くも不覺を取りたれご

國の力に誠なる美を  
扱も東洋に羽を展さんごする  
常に我帝國を侮どり  
過ぎにし日清戦役には  
威を以て支那に返さしめ  
支那滿洲を掠め來て  
深き野心は種々の奸計を以て  
各國を説き  
其慾を逞ふなしつれば  
此儘打捨置くごきは  
使を以て滿洲の  
表面に事を承諾ひて  
速くも吾は覺りしかば  
仁川沖に端なくも  
旅順の港に遊戈する  
東洋艦隊を閉塞し  
進めて敵の籠りたる  
夫兵力の優劣は  
ものなれば  
其機を熟するを待にしが  
仁川旅順の海戦こそ  
陸の戦は必勝なりご

九連城の險に據り  
日本軍の攻撃を  
そも鴨綠江は朝鮮ご  
東洋屈指の大河にて  
河廣ふして岸高く  
巍峩たる峻崖聳へたれば  
天に翔るつばさなく  
容易く渡るへうもなき  
時しも彌生半にて  
百鳥歌を囀づりて  
己が住巢を亡ぶごも  
河原に生る若草も  
人足滋きを恨むらん  
時機熟せりご見てければ  
敵壘略取の命をなす  
いかで躊躇ふ事あらん  
第十二師團の精銳にて  
水口鎮より渡り行く  
君を衛りの近衛團  
義州を経て正面の  
左翼は兼て名を得たる  
西中將を長ごして

鴨綠江の利を占めて  
今や遅しご待懸たり  
支那この國を境界なす  
底深ふして水疾く  
殊に對岸に幾十の  
如何に日本軍勇なりごも  
地に潜る術なければ  
是又無双の要害なり  
花は熏りを競ひつゝ  
聽ては漲ぎる砲煙に  
知らて獻る、傍へには  
春を忘れて萌出づ  
折しも黒木大將は  
五月一日總軍に  
勇みに勇む猛雄等  
右翼は名に負ふ九州男兒  
井上中將指揮を取り  
中央軍は常日頃  
長谷川中將統率し  
九里島より攻懸る  
關東武者の第二師團  
沙河鎮より押渡り



機に臨んで敵軍の  
 只一揉に占領せんぞす  
 重砲聯隊列を布き  
 地軸も裂よと猛射す  
 摺鉢山や赤禿山の  
 巨砲隙なく据着て  
 眼下に見下し猛射なす  
 砲弾飛で百雷の  
 されど勇みし我軍は  
 只一線に進み行き  
 難なく駿河打渡り  
 赤禿山の敵を逐ひ  
 占領なして日の丸の  
 世界に誇りし大敵を  
 實に千載の名譽なれ  
 細谷將軍指揮を採り  
 安東縣の敵兵を  
 劣らぬ功績も珍らし  
 實に後の世の美談なり

根據に憑む九連城を  
 河原の中なる浮洲には  
 總軍前進の掩護なし  
 敵も一途に應戦し  
 峻嶺に據り天險を頼み  
 今しも進む我軍を  
 其砲聲は凄しく  
 一時に落る如くなり  
 御國の爲に死を賭て  
 降り来る弾丸を物ともせず  
 摺鉢山を陥れ  
 九連城を一揉に  
 旗を御空に靡かせつ  
 塵殺にせし功勳こそ  
 之と同時に海軍は  
 鴨綠江を溯り  
 艦の上より退けし  
 實に日の本の譽なり

牧澤大尉

高島秋雨

花は櫻樹人は武士  
 左れば味方の不利なるも  
 部下幾百の生命を  
 弓矢の意地と知られたり  
 其人ありと知られたる  
 九連城の敗敵を  
 部下を撰て二百人  
 折しも起る喊聲は  
 急行疾驅後れじと  
 蛤蟆塘にぞ着にける  
 山は翠に露深く  
 水も彩どり種々の  
 木々の梢も匂ひつゝ  
 春は忘れず萌出づ  
 折柄敵の前衛は  
 蛤蟆塘の地利に據り  
 其全力を注ぎつゝ  
 切て放ちし砲聲は  
 雨と降り来る弾丸は

○牧澤大尉

散るを惜まぬ習慣なり  
 退却く事を耻こなし  
 賭て進むも武士の  
 備も筑紫の聯隊に  
 牧澤歩兵大尉といふは  
 退路に討てて命を受け  
 影を潜めて進み行く  
 早我軍の突撃ぞ  
 山路を貫ぬき溪を縫ひ  
 時しも彌生半にて  
 色々の花綻ひて  
 鳥の囀り風温き  
 修羅の巷の若草も  
 人跡滋きや恨むらん  
 九連城を遁れ出で  
 退ぞく味方を援けんこ  
 機砲速砲押列へ  
 丁岐の峯に射して  
 忽ち血河を漲らす

五十九

時機熟せりご牧澤隊  
 地軸も裂よご射出す  
 潰れ立ちたる沙合を  
 咄ご計りに突て入る  
 退路を遮断れて狼狽し  
 世の諺のそれならで  
 三面の敵一齊に  
 敵は數倍の兵力に  
 人も半は斃れたり  
 素より期する處なれど  
 戦略爲に違算して  
 戦ふ道は一ならず  
 肝要ごは爲すべけれ  
 前に倒れし負傷者の  
 亡び行く身を如何にせん  
 小義に大義は代られず  
 涙を振ひて背進さし  
 果せる哉敵兵は  
 猶も追來る光景なれば  
 生残りたる其部下を  
 備へて敵に突て入り  
 露の命を何かせん

敵の左側に散開し  
 彈雨には敵も堪り兼  
 爰ご見て取る軍の呼吸  
 折しもあれや敗兵は  
 窮鼠反て猫を咬む  
 味方の小勢を侮りつ  
 逆撃數回を試みた  
 味方は最早彈丸も盡さ  
 踏止まりて全滅せんは  
 我隊此處にて滅びなば  
 軍の行動を妨げなん  
 終の勝を制するを  
 されご今退かば  
 殘逆非道の敵刃に  
 さはあれ此地は不利なれば  
 止なく味方を叱しつ  
 大尉の心を哀なる  
 急追負傷兵を逆殺す  
 今は大尉も堪り兼ね  
 勵聲一番〇〇に  
 花は櫻樹人は武士  
 死ねや死ねやご呼りつ

古今に稀有の殊死奮闘  
 元來臆せし敗兵の  
 或は降り又斃れ  
 我が功績に全軍の  
 實に軍人の龜鑑なれ  
 部下の健兒ご諸共に  
 昇る旭の旗の下  
 青史に永く名を留め  
 琵琶の調への音色にや

群がる敵を薙拂へば  
 なごて支ふるごあらん  
 一人残らず撃取りし  
 勝を取りたる譽こそ  
 左は去りながら君が身は  
 貫き止め草の露  
 果敢なく消て我國の  
 幾千代掛て聞ゆへき  
 君が俤かけ遺るらん

### 旅順の陥落

高 島 秋 雨

武士の鍛ひ上たる魂に  
 征露の戦酣に  
 死屍壘々ご山を築き  
 祖國の爲ご敵味方  
 何時休戦へくも  
 諸も敵の天險ご頼みたる  
 旅順口の要塞を攻圍せる  
 乃木陸軍大將は  
 彼も學術の理を以て

巖もなごか貫通らざるへき  
 彼我交戦の度を重ね  
 川又血潮漲れご  
 命を的に戦へば  
 見ぬざりけり  
 東洋唯一の軍港たる  
 我軍の司令官  
 既にその年暮ぬれご  
 築上たる塞なれば

多くの兵を失へども  
 斯くて日敷を經る時は  
 世上の誹謗も如何ならんこ  
 我軍此任に當りてより  
 されど未だ其功を奏せず  
 又露西亞の本國に  
 鑿鑿到着なすあらば  
 要塞堅固なりと雖も  
 壘險と雖も我は又  
 なさて陥ざるこあるべき  
 素より血氣の兵士が  
 頃は明治乙己の  
 今日を限りと酌む屠蘇の  
 身を堅めたる宿營地  
 雪を侵して撃て出で  
 曙告る鳥の音も  
 早くも麓に辿り着く  
 巨砲隙なく放ち掛け  
 將は傷つき士は斃れ  
 我は躊躇ふさまもなく  
 長討るれば躍り越え  
 其光景の凄まじさ

其功未だ全たからず  
 味方の不利は言ふに及ばず  
 部下を督して言る様  
 月早數回を重ねたり  
 斯くては敵に防備出來  
 羽振を嗚すバルチツクの  
 是もゆゝしき大事なり  
 我に萬斤の巨砲あり  
 大和魂具はれり  
 疾く乗り取れと令すれば  
 いかで躊躇ふこあらん  
 年新まる元旦に  
 酒に心も最清く  
 去年より積める白妙の  
 松樹山にぞ向ひける  
 程なく聞ゆる東雲に  
 敵はそれと見よりも  
 小銃雨と射るからに  
 鮮血雪を染れども  
 友斃るれば楯ごなし  
 面も振らず進み行く  
 如何なる猛將強卒も

如何でか敵するこあらん  
 四邊は黑白も分兼ねれば  
 我軍勝利此一舉にありと  
 喇叭の聲も勇ましく  
 命と頼む砲壘に  
 敵は意外に狼狽し  
 一支ねもなく退却ぬ  
 難なく松樹山を占領し  
 之に加へて天の時  
 敵の妖氣を拂ひつゝ  
 敵の大將ステッセル  
 今は早是迄なりと  
 久しく籠りし城を開け  
 皆我軍に捧けたる  
 噫人爲か天祐か  
 經營辛苦を重ねたる  
 年の始めの朝風に  
 旗を凜々しく押立てし  
 千代萬代の末迄も  
 語りて消ぬを譽なる

折しも吹雪烈しくて  
 天の與へと長官は  
 烈しく傳ふる號令に  
 登りのほりて敵兵の  
 吶と計りに突撃すれば  
 猛虎に出會ひし狐狸の如く  
 隼りに猛りし我軍は  
 地の利を占むる人の和に  
 曉風凄く起り立ち  
 續いて望樓攻落せり  
 其光景を望み見て  
 軍使を遣りて降を乞ひ  
 残りし艦も銃砲も  
 心の中を哀なる  
 東洋一と憑みこし  
 難攻不落の旅順口  
 誰も迎ふる日の丸の  
 其勳こそ目覺しけれ  
 傳へて語るも目出度しや

陸戰第一戰死者田所清熊氏を悼む

高 畠 秋 雨

仁川旅順の海戦に  
陸には豫て名を得たる  
朝鮮國に精兵を  
備も我軍の先鋒  
夜も日に繼ぎて平壤を  
義州の要路定州に  
丸尾騎兵中尉をして  
頃三月八日にて  
雪亦山を包みつゝ  
中尉は四名の部下を率ひ  
清川江を打渡り  
敵の一隊三十騎  
味方は主従五騎なれど  
大寧江を易々こ  
嘉山を越えて進む時  
二百餘騎を知られける  
猶も擬勢を粧ひて  
元來臆せし敵の兵

脆くも敗れし敵の軍  
戰機策略我物こ  
進めて暴掠を憚らず  
相の浦騎兵大佐は  
占領なして猶も又  
夥多の敵兵集ること聞き  
其敵情を探らしむ  
春は言へど肌寒く  
長閑き笑や隠すらん  
中々心も安州や  
舊津邑に到る頃  
進むに確に出會たり  
奇計を以て敵を逐ひ  
渡りて敵に追躡し  
又も出會し敵兵は  
左れど中尉は退かず  
急行敵に迫りしかば  
後ろに大軍攻來ること

想ひ恐れて退く状は  
富士川の夜陣にて  
周章狼狽なしたるも  
此有様を望み見て  
あな笑止なる敵兵かな  
定州に着くは瞬くうちこ  
折しもあれや敵兵は  
覺りし者が停止て  
中尉は部下を止まらしめ  
猶も擬勢を張りけれど  
退却もせず暫時は  
遂に決して追來る  
以前來し途に駒を立て  
十七騎にて迫り來る  
前なる敵は新銳なり  
傍の畑に駒を入れ  
早くも一彈飛び來り  
愛馬板倉號を斃しけり  
勢わ千中尉を促しつ  
我馬既に斃れたり  
いかで逃るゝ道あらん  
是又天の命する處

往古平の性盛が  
禽の羽音に驚きて  
斯やご思ひ合されたり  
中尉も部下も嘲笑ひ  
此儘にして追行かば  
勇みくゝて進行く  
我斥候は五騎なりこ  
我動靜を窺ひければ  
單身敵に近附て  
敵もさるもの流石にて  
牛信半疑の光景なりしが  
中尉は今は是迄こ  
歸る途中に又も敵  
後の敵は猶近し  
欺き遁るゝにしかじこて  
引返さんごす千刹那  
中尉の從卒田所が  
田所早くも飛下りて  
小隊長殿中尉  
前後に多數の敵を受け  
某幸ひに馬を失ふ  
不省某殿せん

心安く思召し

言問あらせす迫る敵

辭む中尉を返らしめ

眞一文字に斬て入り

一町計り退きしが

止り見れば田所は

孤軍前進定州頭。

吾馬斃今吾事畢。

口吟みつゝ圍をば

打物術にて叶じこ

執銃亂射なしければ

なご彈丸に數ふべき

盛ご匂ふ二十二を

異域の花ご散りにける

卑怯なる敵の舉動かなご

部下の諫めに止まりて

心の中や如何なりけん

盡せし忠は帝國の

征露陸戰第一の

皆人毎に賞すめれ

早く退却せられよご  
物々しやご田所は  
刀を騎して敵の中  
中尉はこのまに馬を驅り  
田所の氣に懸り

氣蓋韓山敵衆周。  
春風暖處骨猶留。

縦横無盡に切捲る  
敵は駒を左右に乗分け  
如何に田所勇な百も  
所厭す彈創を受け

一期ごなしてあねなくも  
中尉は眺めて齒咬なし  
駒を返さんごなしけるが  
安州指して引上し

さはさりながら田所が  
青史に永く名を止め  
花ご散りにし功績ごご  
實に武士の譽なり

### 古今琵琶歌集終

明治三十九年一月二日印刷  
明治三十九年一月十五日發行

古今琵琶歌集  
定價金拾五錢

編纂者 琵琶の家

印刷者 鈴木種次郎

發行者 鈴木常松

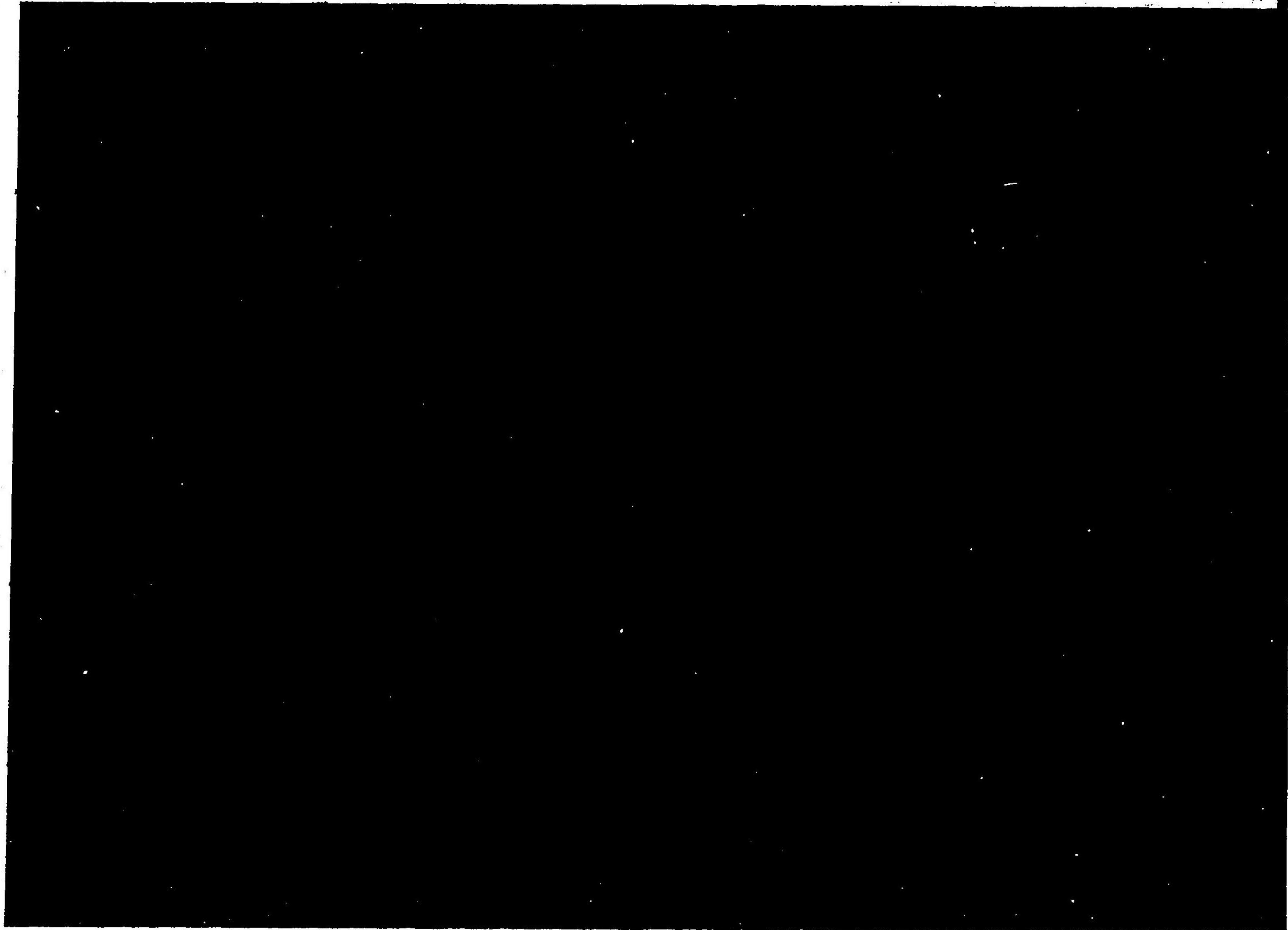


發行所 東京市神田區錦町一丁目 修文館

販賣所 大阪市東區安土町四丁目 積善館本店

販賣所 廣島市博多中心町 積善館支店





1



特48

910

古今琵琶歌集

国立国会図書館

074592-000-9

特48-910

古今琵琶歌集

琵琶の家/編

M39

CEJ-0048



